

平成 30 年 6 月 27 日現在

機関番号：33915

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07317

研究課題名(和文) 大学大衆化以後のアカデミズムの変容と「現代思想」受容に関する教育社会学的研究

研究課題名(英文) Research of educational sociology on "gendai-shisou" (French Theory) and the change of academism

研究代表者

佐々木 基裕 (Sasaki, Motohiro)

名古屋女子大学・文学部・講師

研究者番号：90780560

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、1980年代における人文・社会科学的な「学際性」の典型例として「現代思想」という対象に焦点を当てる。その日本における受容過程を、学会誌における引用情報の調査、現代思想雑誌における著者情報の調査、学説史における「現代思想」に関わる記述の整理の3つのアプローチを通じて行った。学会誌と現代思想雑誌の調査については、そのデータベース作成の途上にある。学説史の調査については、知識社会学的な実態と意識の乖離についての検討が有効であることが確認された。

研究成果の概要(英文)：This research focused on "gendai-shisou" (French Theory). It is a typical interdisciplinary knowledge in 1980's. To find out the way how it was legitimated in the Japanese academic societies, I adopted three approaches. The survey of academic journals, "gendai-shisou" journals and the doctrinal histories. The database of citation and author data remain incomplete. Through the survey of doctrinal history, I supported efficacy of methods of sociology of knowledge in the research of "gendai-shisou".

研究分野：教育社会学

キーワード：現代思想 ニュー・アカデミズム 知識社会学

1. 研究開始当初の背景

近年の高等教育改革論議においては、グローバル化という大学を取り巻く状況の変化を背景として、社会と世界へ開かれた知の養成が中心的な関心事となっている。なかでも、自然科学とは異なり、金銭的な利益を生み出し難い人文・社会科学領域は、国立大学文系学部廃止問題に象徴されるように、構造的な変容を迫られるにまで至っている。

大学で生産される知識に関する研究としては、これまで科学社会学の領域で様々な研究の蓄積がなされてきた。教育社会学領域では、科学社会学の方法を援用した新堀通也による一連の研究が代表的である。例えば「学閥」研究は、旧帝大の講座制に代表される「学閥」という制度におけるインブリーディング（純血主義）によってメリトクラシーが阻害されていることを実証した（新堀 1984）。また学歴エリートの再生産や学生文化としての教養主義に関する「教養文化」研究では、学会を中心としたアカデミズムとも、商業的価値が優先されるジャーナリズムとも異なる、アカデミック・ジャーナリズムが日本的な知の形成に重要な役割を果たしてきたことが明らかにされている。しかし双方ともに「学閥」「教養」が自明のものであった 1960年代までを検討の対象とする傾向が強く、エリート段階にあった時代の大学知に研究が集中してきた現状がある。

そこで本研究では、現代の状況までを視野に入れたアカデミズム界の変容と大学地知との関係の検討を目的に、大学大衆化以後の状況において発生した人文知的な学際性の典型例として、「現代思想」という対象に着目した。「現代思想」は、フーコーやデリダからフランス現代哲学を中心とした人文知として「学際的」に受容され、様々な学術領域に影響を与えてきた。しかしその一方で、マス・メディアを巻き込んだ「ニュー・アカデミズム」ブームは「知の遊戯化」とも評され、筒井（2000）が描いたように、浅田彰や中沢新一に代表される現代思想を受容した学者は学閥や学会を中心としたアカデミズムよりは、論壇誌や思想誌といったアカデミック・ジャーナリズムを主たる活躍の場としていた。こうした性格を踏まえれば、「現代思想」を 1980年代における人文知的な学際性の事例として、「学閥」「教養文化」研究の系譜の上に設定することができる。

「現代思想」という対象は、上述した論壇誌や思想誌における「批評」という領域で盛んに語られる一方で、それが学術界に与えた影響についての実証的な研究の蓄積には乏しい。アカデミズム／ジャーナリズムという区分のもとに見れば、特にそれはアカデミズムの側に「現代思想」受容の歴史、効果、機能についての反省的検討がなされておらず、量的にも質的にも十分な調査研究が行われてきたとは言い難い。

2. 研究の目的

本研究では、上述した研究上の背景・課題認識の上に立ち、アカデミズムの中で「現代思想」がどのように受容されたのかを実証的に検討することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、大学大衆化以後の状況における「現代思想」とアカデミズム界との関係をより重層的に捉えるために、以下の3つのアプローチで上記の課題に取り組んだ。

①アカデミズムにおける「現代思想」受容の調査

学会を中心とした正統なアカデミズム内の学問領域において「現代思想」がどのように受容されたのかを明らかにする。

学会誌の引用情報をデータベース化し、科学社会学の手法を用いた引用分析を行う。

②アカデミック・ジャーナリズムにおける現代思想受容者の調査

アカデミック・ジャーナリズムにおいて現代思想を受容したのはどのような学者であったのかを把握する。

現代思想系雑誌における著者情報を集積し、専門領域等の情報を補完する。

③「現代思想」受容とアカデミズムの変容との関係に関する言説の検討

各学界の有力研究者による学史・学会史における「現代思想」に関する記述を収集し整理する。戦後半世紀を超えた 2000年代前後から、「戦後〇〇学史」という形での学界回顧が各学界で行われている。それらを資料として各学界の制度的変容と「現代思想」との関連に関する知識社会的な意味での「意識」を抽出する。

4. 研究成果

以下、3つのアプローチごとに研究成果の概略を記す。

①アカデミズムにおける「現代思想」受容の調査

日本教育社会学会『教育社会学研究』を中心に、データベース作成を行った。結果としては、データベースは未だ作成途上にある。想定していたよりも作業が難航した理由は、主として2つである。

第1に、J-Stageにおける検索を利用した場合、誤字脱字に対応できないため、すべてすべて目視でデータ入力を行う必要があったためである。実際にはこのようなケースは稀であり、仮にそうした誤記が混入（あるいは検索漏れ）したとしても、分析上の結果には影響しないと想定していた。しかし「現代思想」受容が始まった 1980年代当初は、引用数そのものが少ないこと、また想定以上に誤字が多いこともあり、J-Stage を利用した

調査を断念せざるを得なかった。日本社会学会『社会学評論』における「社会学評論スタイルガイド」などの登場で、論文様式の徹底がなされるようになるのは2000年代以降であり、それ以前の引用情報については誤記がある可能性が高く、OCRを通じたデータベース化には不適合であることも、調査を通じてわかってきた。

第2に、研究申請時より補助金が減額されたため、データ入力補助のためのアルバイト謝金の予算を削らなければならなかったためである。上記のような難点を克服するためには、人力による手作業でのデータ入力が必要となる。そのため、アルバイト謝金を削った分は代表者が入力を行うこととなった。これが入力に多大な時間を割かざるを得なかった最大の理由である。

上記の経緯のため、データベース作成は途上の段階にあり、本格的な分析の段階にまで至ることができなかった。しかし、その副産物として所属機関の紀要や図書に関連する成果を発表することができた。また、データベース作成上のノウハウは今後の研究に活かすことができる。引き続き、作業を継続していく予定である。

②アカデミック・ジャーナリズムにおける現代思想受容者の調査

『現代思想』（青土社）に掲載された論文・記事の執筆者情報を集積した。時期によっても異なるが、『現代思想』掲載論文・記事には末尾に著者の専門領域（あるいは所属機関や職業等）が記されている。その情報を創刊号から順次、調査していった。

この作業についても、やはりOCRは利用できなかった。雑誌の保存状態や印刷の状態の問題で、性格に文字情報を読み込むことが困難であった。そのため網羅的なデータベースの作成は以降の課題として、サンプルとして10年毎に1年分の発刊分について調査を行った。そのためあくまで推測レベルでしかないが、今後の調査にあたっての以下のような示唆が得られた。まず、ここに記される領域は、アカデミズムにおける専門領域と一致していない可能性が非常に高いということである。アカデミズムの学会誌には論文を掲載していないケースや、そもそも独自の屋号を記しているケースもあった。つまり、アカデミズムにおける専門領域（ディシプリン）に基づいて専門領域を示しているのではないということである。また、同一の人物で時代や特集によって表示する専門領域を変更させている可能性がある。

本アプローチの課題としては、上述の示唆を実証的に検討する段階に至らなかったことである。アプローチ①の作業を進捗すれば、それと対応した検討が可能となる。例えば、『現代思想』で専門領域を「教育社会学」と表示している研究者が、『教育社会学』に実際に論文を掲載しているか、その時期はど

らが早いのか、などを逐一検証することができるようになる。しかしそれが研究期間内には叶わなかった。その代替手段として、今後の調査の礎とすべく、より幅広く現代思想系雑誌を収集することを行った。

③「現代思想」受容とアカデミズムの変容との関係に関する言説の検討

『教育社会学研究』における学説・理論特集の収集ならびに検討を行った。結果として、以前に行った研究（第67回日本教育社会学会大会発表「社会学・教育学・教育社会学におけるブルデュー受容に関する知識社会的検討」）において行った整理から大きく逸脱しない結果が得られたと言って良い。端的に言えば、2000年代以降、特に2010年代になってから「現代思想」受容を正統化する言説が登場し始めていた。

そのため『教育社会学研究』の検討を行った後に方針を見直し、次のような調査を行った。教育社会学にかかわる教科書において、「現代思想」（「ニュー・アカデミズム」「ポストモダン（思想）」等を含む）の受容がどのように記述されているのかを収集し、検討した。結果としては、教育社会学領域における「現代思想」受容を教科書知識として位置づけている記述はほとんど確認されなかった。この分析結果はいくつかの解釈可能である。まず、学会誌における言説が実態に即していないことが考えられる。つまり、『教育社会学研究』のみを参照して、あるいはそれすら参照せずに当時の自らの体験を基に、そうした言説が積み重ねられている可能性である。また、「現代思想」はアカデミック・ジャーナリズムにおける知であるということが潜在的に教育社会学者たちの間に共有されていたために、それを専門的な研究に援用することはあっても、教科書知識として正当化させるものではない、と考えられていた可能性がある。あるいは、学会誌での検討がこれからなされ、その次に（将来的に）教科書知識として正統化されていくということは想定される。ただしその場合、現状で何を参照しているのか不確かな学説史が定説として参照されることが想定されるため、今後の注視が必要であると考えられる。

【参考文献】

- 新堀通也編, 1984, 『学問の社会学』有信堂高文社。
竹内洋, 2003, 『教養主義の没落—変わりゆくエリート学生文化』中公新書。
筒井清忠, 2009, 『日本型「教養」の運命—歴史社会学的考察』岩波現代文庫。
筒井康隆, 2000, 『文学部唯野教授』岩波現代文庫。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

1. 歌川光一・佐々木基裕, 2016, 「教育文化に関する歴史及び思想問題としての近現代日本の習い事—『嗜み』『師事』の社会的意味に焦点を当てて—」『音楽文化の創造』, 76: 15-19.
2. 佐々木基裕, 2017, 「学校教育における研修の意義と目的—「修養」思想の変遷—」『教育・保育モノグラフ No. 1 卒業研究をこえて』, 213-218.
3. 佐々木基裕, 2017, 「学校知識の教育社会学—教育課程編成理論の変遷から—」『児童教育論集』, 1: 19-27.

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 1 件）

1. 佐々木基裕, 2018, 「学校教育における教育目標—教育政策としての PDCA サイクルの検討—」名古屋女子大学文学部児童教育学科編『教育・保育職シリーズ 5 教育・保育の新視点』, 21-30.

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々木 基裕 (SASAKI, Motohiro)
名古屋女子大学・文学部・講師
研究者番号：90780560

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()